

## エコツアー

## 持続可能な地域づくりに挑むまち、東近江市を訪ねて

村杉 幸子

今年のエコツアーは、去る11月24日、東京から7名の参加者が近江電鉄の八日市駅で、今回の旅のコーディネーター、菜の花プロジェクトネットワーク代表の藤井絢子氏の出迎えを受けて始まった。旅の舞台、東近江市は滋賀県の南東部、東に鈴鹿山脈、西に琵琶湖を擁し、その間に広がるのどかな農村集落に11万5000人が暮らすまちである。

持続可能な地域づくりを実践している現場の視察を目的とする今回のツアーは、効率的なスケジュールのおかげで、中身の濃い充実したものだった。

結論から先に記すと、ここでは人や自然への「優しさ」をベースに、さまざまな組織や企業、人々が垣根を越えて連携し、新たなコトやモノ、そしてつながりが生まれていた。それらの具体的な事例を目の当たりにしてカルチャーショックを受けたのは私ばかりではないだろう。以下に、それらのうちから市民活動に関わる二つの事例をご紹介します。

### 1. 菜の花エコプロジェクト

車に分乗して最初に向かった先が2005年に開館した市立「あいとうエコプラザ菜の花館」、ここは「菜の花エコプロジェクト」の推進拠点であり、環境教育のための施設でもある。

「菜の花エコプロジェクト」（以下エコプロジェクト）とは、転作田や耕作放棄地に植えた菜の花から食用のなたね油をつくり、廃食油は市民の手で回収してせっけんや軽油代

替燃料（BDF）にリサイクルし、搾油時に出た油かすは肥料にする、というように、地域内で資源を循環させる取り組みを通して、自立と自律の地域づくりを目指す運動、とのことであった。

早速、エコプロジェクトの生みの親である藤井氏の案内で館内をまわると、そこには上記アンダーラインの製品をつくる3種のプラントのほか、稲作で発生するもみ殻を炭化して土壌改良剤にするプラントまでもが置かれていた。また、館内で発生する熱は温水に転換し、それを菜種の乾燥、床暖房、給湯などへ利用するといった具合で、すべてに無駄がない。

これらの取り組みを目の当たりにして圧倒されている私たちを前に、藤井氏はここまでに至る40年の道のりを語ってくれた。

発端は1977年に琵琶湖の赤潮発生をきっかけに「石けん使用運動」が始まり、そこで誕生した市民グループによって廃食油を集めてリサイクルする運動へと発展、次いで自分たちの手で食用油をつくろうと、1998年に菜の花栽培が始まった由。

今日ではそのBDFが公用車やコミュニティーバス、農林業の機械などの燃料に利用され、さらに地域のイルミネーションイベントや菜の花畑のライトアップにも活用されている。市内の廃食油回収量は毎月約23000ℓ、回収には各所に置かれた回収BOXのほかに、コミュニティーバスが一役かっており、人々がバスに廃油を持ち込むと100円分のエコチケットがもらえる仕組みまでできている。

同時に、菜種の買取りや油、肥料などの販売事業も「菜の花館」の指定管理者の手によって行われるなど、資源だけでなく資金を循環させることによって新たなコミュニティービジネスも生まれている。「お金がまわらないと人は動かない」とおっしゃる藤井氏の言葉が印象に残った。

当日いただいた資料には、このエコプロジェクトがもたらした波及効果が図1のように示されている。このように多くの主体の関わり合いから、結果として地域に新たな連携が生まれたことは想像に難くない。以下のプロジェクトも、そのうちの一つといえるだろう。

## 2. あいとうふくしモール

これは「愛東地域の暮らしに関わる全てのことについて、いろいろな思いをもった個人や事業所が集まり、それぞれの特技や専門性を生かして助け合う」という構想のもとに生まれた組織で、2013年から「食」「ケア」「エネルギー」に関わる3つの事業所が、モールと名付けられた一つの敷地内で互いに連携しながらそれぞれの事業を行っている。具体的には、「食」は高齢者が働く拠点としてのレ

ストラン経営や配食サービス、「ケア」は高齢者の介護事業、「エネルギー」は里山保全で生まれた間伐材を使った、知的障がい者による薪づくりである。

私たちは2日目の昼食をこのレストランで、地元の野菜を使った美味しい郷土料理をいただき、その後、モール活動の拠点となっている近くの古民家に移動して、モール運営委員会副代表の野村正次氏から上記のしくみなどについて説明をうけた。この古民家も連携事業の一つとして、暮らしの中の困りごとの相談やその支援に活用されているとのことであった。このほかにも、太陽光の発電施設の設置、不用品交換市、若者向けの仕事と居場所づくりなどの連携事業が進行中とか。

「事業開始以来5年半で基礎ができた。これからは、いかに発展させるかだ」と語る野村氏の言葉が頼もしい。

最後に、この度のツアーを通して多くの「気づき」を与えていただいたことに、藤井氏をはじめ、関係者の皆さまに御礼を申し上げます。今後この経験を実際にどう生かすかが私自身の大きな課題です。

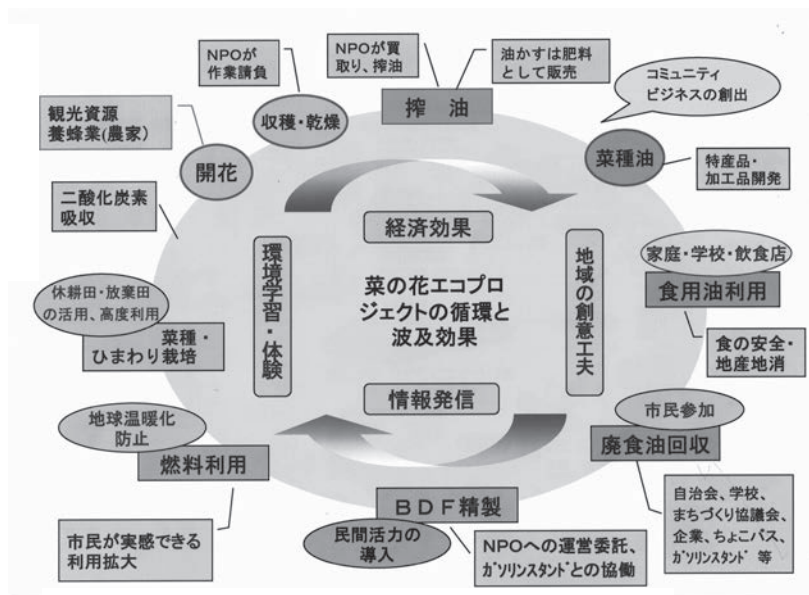


図1 菜の花エコプロジェクトが地域にもたらす波及効果